

## 『オプス・アルキテクトニクム』におけるボロミーニの オラトリオのファサードの基本構想

岩谷 洋子\*

### Borromini's Idea of the Facade Design of the Oratory in the *Opus Architectonicum*

Yoko IWAYA\*

#### Abstract

Francesco Borromini (1559-1667), a Baroque architect in Italy, is the author of the *Opus Architectonicum*. It is important to comprehend Borromini's idea for architecture with the "Opus", because in the "Opus", Borromini described Oratorian architecture in Rome by many elaborate drawings as an architecture book.

Particularly the facade of the Oratorio, standing next to the church, reflects the significance of the Oratorio in the surroundings. The facade has a curved form to invite people inside, and in the "Opus" the design process is emphasized that Borromini exploited the restraint effectively, and created the impressive three-dimensional configuration by the distribution of the columns and pilasters on the curved walls. So, it is recognized that Borromini's project of the facade of the Oratorio was integrated with the internal and external space.

#### 1. はじめに

イタリア・バロック期の建築家フランチェスコ・ボロミーニ Francesco Borromini (1559-1667年)は、17世紀ローマを中心に活躍し、その建築書としてオプス・アルキテクトニクム(以下、『オプス』と略す)を著した<sup>1)</sup>。『オプス』においては、詳細に描かれた図面をもとに、オラトリオ会における部屋ごとの機能や各部のデザインが具体的に論じられている。そのため『オプス』からは、ボロミーニ自身の建築に対する考えが明確に読み取れる<sup>2)</sup>。

また、『オプス』で主題として扱われているオラトリオ会の建築【Figure 1-4】は、ボロミーニが生涯にわたって手がけた計画のなかでも、特に規模が大きく中心的な仕事であり、ボロミーニの建築に対する考えを探るうえではきわめて重要である。

オラトリオ会とは、都市ローマを活動の基盤として新たに成立した新修道会のひとつであり、その創設は16世紀に遡る<sup>3)</sup>。対抗宗教改革期のローマにおいては、同様に、ローマ法王に対して従順な態度で世俗社会と密接に関わりをもち

\*駒沢女子大学 非常勤講師



Figure 1 『オプス』におけるオラトリオと教会堂、および西側のファサードと時計塔の景観図： *Opus Architectonicum*, Tav. 67.

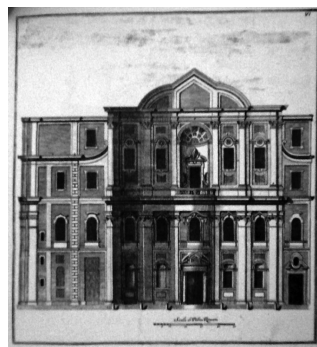


Figure 2 『オプス』におけるオラトリオのファサード、立面図 Tav. 6.

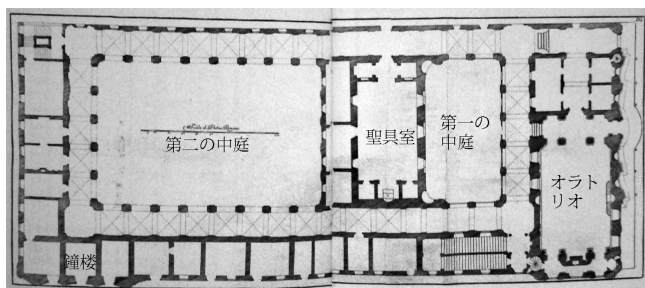
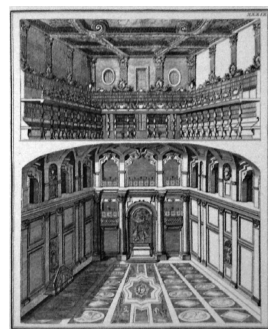


Figure 3 『オプス』におけるボッロミーニが設計した部分の平面図、Tav. 3. (室名は筆者が記入)

オラトリオの  
←ファサード  
中央部  
Figure 4  
『オプス』におけるオラトリオと図書室の断面透視図  
Tav. 39.



ながら活動するイエズス会やバルナバ会などの新修道会が次々に誕生していた<sup>4)</sup>。これらの新修道会はローマの都心部に拠点を得たが、やがて勢力を伸張するにつれて、それに適った規模の教会堂や修道院を望むようになり、イエズス会を初めとして大規模な修道院建築の建替えに着手していった。オラトリオ会もまた、このような大規模な建替えの計画を進める最中に、ボッロミーニと関わりをもつようになったのである<sup>5)</sup>。

都心におけるこれら新修道会の大がかりな建設活動は、周辺環境に対して多大な影響を及ぼすことになる。会が活動するのに適した聖堂・修道院を建設するために周辺の敷地を買収・併合し、結果としてローマ都心部の細かく不規則な敷地がまとめられ、大きく変貌していった。

そこに築かれた大規模な建築は、広場や通りなどの都市景観を大きく支配した<sup>6)</sup>。

特に、聖堂は多くの世俗の人々を受入れることができるように、格段に規模が拡大され、周囲の人々との関わりがいつそう深められていった。なかでもそのファサードは、聖堂が都市空間と直接的に接する場として重要であり、そこに訪れる人々を聖堂の中の敬虔な世界に引き込むと同時に、世俗の都市空間の中で、修道会の象徴である聖堂の存在を強調しながら、劇的な景観を演出する。

ボッロミーニが関わるオラトリオ会の建築もまた、周辺の敷地割を一変するほどの大規模なものであり、17世紀初めに完成した教会堂<sup>7)</sup>や、ボッロミーニの設計によるオラトリオには、多くの人々が集まるようになっていた。人口が密

集する地域に開かれた広場において、教会堂のファサードにオラトリオのファサードが並び立つという特異な様相は、意匠上の問題や修道院内部の計画とともに、周囲の都市空間との関わりのなかで考える必要がある。本論では、ポッロミーニが設計した聖堂のファサード全体について理解したうえで、特にオラトリオのファサードについて、『オプス』を中心に考察する。

## 2. カルロ・マデルノによる聖堂建築のファサード

### 2.1 マデルノとポッロミーニ

ポッロミーニは、出生地である北イタリアのロンバルディア地方を離れ、1619年頃からはローマで活動する<sup>8)</sup>。当時のローマでは、同郷の建築家カルロ・マデルノ Carlo Maderno (1556-1629年) がサン・ピエトロ大聖堂の建設に取り組み、ポッロミーニは母方の血縁者レオーネ・ガルヴォ Leone Garvo の紹介により、マデルノのもとで修業を積むことができた。

この時期のローマにはロンバルディア地方出身の建築家・建築職人が多く働き、マデルノもまた同郷で血縁関係にある建築家ドメニコ・フォンターナ Domenico Fontana (1543-1607年) のもとで、建築家としての専門的な技術を身につけ、パトロン・職人仲間などの人脈を得た<sup>9)</sup>。マデルノはローマ・バロックの潮流の中で先駆的な建築家となり、ポッロミーニはその恩恵を受けながら、次世代の建築家として、彫刻家・建築家であるベルニーニ Gian Lorenzo Bernini (1598-1680年)、画家・建築家のピエトロ・ダ・コルトーナ Pietro da Cortona (1596-1669年) とともに、17世紀のローマで活躍することになる<sup>10)</sup>。

『オプス』の中には、ポッロミーニが建築家としてのマデルノやその建築をいかに捉えていたかは、何も論じられていない。ポッロミーニは石工職人から建築家として身を立てるまで、

助手としてマデルノに仕え、40年近くの時を隔てて死に際しても、ローマの聖堂にあるマデルノの墓のそばに埋葬してほしいと懇願し<sup>11)</sup>、生涯マデルノを慕っていた様子が窺われる。また、ポッロミーニは若年期において常にマデルノの身近でその図面を描き、師弟の情感だけではなく、建築家としても深く理解し信頼し合っていたことが確かめられる<sup>12)</sup>。

したがって、まずマデルノによるローマの聖堂のファサードについて、その特徴を分析する。

### 2.2 サンタ・スザンナ聖堂のファサード

マデルノは、ローマにおいて、オベリスクの建立や都市計画上の技術者としての仕事に関わり、また建築家として、パラッツォやヴィッラなどの世俗建築や、建築家にとっての最高の榮譽となるサン・ピエトロ大聖堂の計画を含めて聖堂建築にもたずさわった。このような生涯のなかで、聖堂建築として最も純粋にマデルノが独自の考えを表明することができたのは、サンタ・スザンナ聖堂 Santa Susanna のファサード (1597-1603年) であろう【Figure 5】。それ以外にもマデルノは、1620年にサン・ジョヴァンニ・デイ・フィオレンティーニ聖堂 San Giovanni dei Fiorentini や、サンタンドレア・

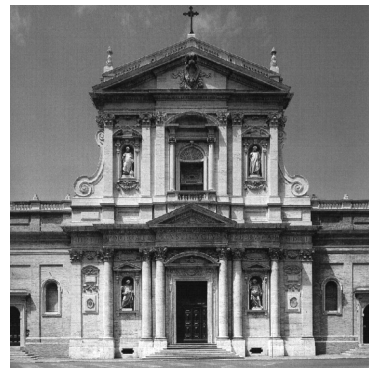


Figure 5 C. マデルノ、サンタ・スザンナ聖堂、ファサード

デッラ・ヴァッレ聖堂 Sant' Andrea della Valle などの大規模な聖堂の計画を手がけるが、前者のファサードは1734年アレッサンドロ・ガリレイ Alessandro Galilei により計画されたのものであり、後者はカルロ・ライナルディ Carlo Rainaldi (1611-1691年) によって後に大きく設計変更された。

サンタ・スザンナ聖堂のファサードは、中央に向かうほどスパンが広がり、同時に柱が次第に手前に迫り出すという3次元的な構成が特徴的であり、それがバロック建築の発端としても認められている<sup>13)</sup>。ここで使用された円柱は、平らな壁体から大きく突き出し、ファサードに彫塑的な陰影の効果を生み出している。後述するように、ボッロミーニもサン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ聖堂やサンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂において、よりいっそう彫塑性を強めた円柱を曲面の中で使用し、またオラトリオのファサードにおいては、全体に平らなピラスターを用いるなかで1層目の中央入口部分を強調するために円柱を配置し、部分的に用いることでその効果を考えている。このような円柱によってファサードに立体感と陰影を生み出し

ていく手法は、ボッロミーニに共通するだけでなく、ピエトロ・ダ・コルトーナ【Figure 6】や、さらに後の時代のマルティーノ・ロンギ Martino Longhi il giovane (1602-1660年) にも採り入れられる【Figure 7】<sup>14)</sup>。

また、マデルノがローマで活動した16-17世紀には、イエズス会のイル・ジェズ聖堂 Il Gesù の長堂式平面のスタイルが普及し始めていた。聖堂を計画したジャコモ・バロツィ・ダ・ヴィニョーラ Giacomo Barozzi da Vignola (1507-1573年) はファサードのデザインも考えていたが、実際にそれを計画し建設したのは、1568-1584年にジャコモ・デッラ・ポルタ Giacomo della Porta (1540年頃-1602年) であった。マデルノは両者によるイル・ジェズ聖堂のファサードのデザイン【Figure 8, 9】を参照したようであり<sup>15)</sup>、サンタ・スザンナ聖堂のファサードをそれらと同様な2層構成とし、特にヴィニョーラが示すような規範に従ったデザインを選択し、そこから意図的に逸脱を図ることはなかった。実際、ヴィニョーラによるファサードは、円柱によって中央部が強調されているものの、全体的な高さとの比率やピラス



Figure 6 P.ダ・コルトーナ、サンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂、ファサード



Figure 7 マルティーノ・ロンギ・イル・ジョヴァネ、サン・ヴィンチェンツォ・エダナスタジオ聖堂、ファサード

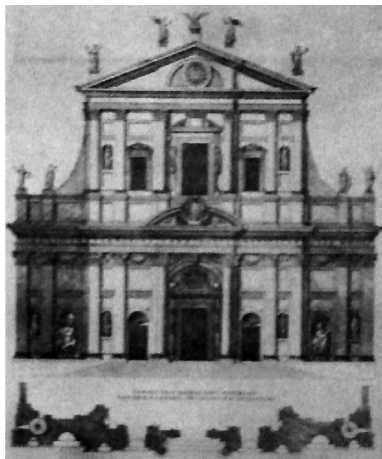


Figure 8 G. B. ヴィニョーラ、イル・ジェズ聖堂、ファサード案、1568年（銅版画、1573年）



Figure 9 G. デッラ・ポルタによるイル・ジェズ聖堂のファサード（G. B. Falda, *Il Terzo Libro del'Nuovo Teatro*, Roma, 1665-67, Tav. 20.）

ターの高さと配置との関係などによって全体が静的に整えられている。

これに対してデッラ・ポルタによるファサードは、ヴォリュート（両脇の渦巻装飾）が人目を引き、2層目中央部のピラスターに挟まれた開口部に円柱が配されるなどの点では、マデルノのサンタ・スザンナ聖堂のファサードと共通する。しかし、デッラ・ポルタの案では、1層目には中央のみに円柱が配され、残りは平らなピラスターにより区分され、ファサード全体と

しては平坦な印象を受ける。

さらに、マデルノによる2層構成のファサードは、上下層はそれらを分割する水平帯を越えて呼応しあうように垂直方向の繋がりが強調され、かつ彫塑的な表現により集中性が高められて、全体的に統一感が保たれている。ローマ以外の地であるが、ヴェネツィアのアンドレア・パッラーディオ Andrea Palladio (1508-1580年) による聖堂のファサード【Figure 10, 11】のように、中央部分は巨大な円柱により単層と



Figure 10 A. パッラーディオ、サン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂



Figure 11 A. パッラーディオ、イル・レデントーレ聖堂

なり、水平帯に分断されないまとまりのある外観を呈するという先例もあった。マデルノはパッラーディオによる建築書を所有し、これら2つの聖堂についても十分研究していたはずであるが、これらに倣う形式は選択しなかった<sup>16)</sup>。

一方、聖堂ファサードの周囲も視野に入れると、サンタ・スザンナ聖堂では、その左側に新しい修道院のファサードが並ぶために、聖堂の右側においても、左側と同じようなデザインのファサードが配置されることになった<sup>17)</sup>。これら左右のファサードは平坦な煉瓦の壁面であり、聖堂よりも簡粗な素材を用いて、聖堂と同じようなデザインのピラスターによって分節することで、聖堂を引き立てつつシンメトリーな全体構成をなし、統一感が生み出されている。

しかし、これら聖堂両側の壁面には、背後の空間を反映させようとする意図はない。聖堂自体のファサードもまた同様であり、前面広場の真正面以外からの視点によると、独立した幕のように背後にある聖堂本体とは無関係に、著しく高いことが明らかである。

同時期にマデルノが関与していたローマのサン・ジャコモ・デッリ・インクラービリ聖堂 San Giacomo degli Incurabili<sup>18)</sup> では、それが面するコルソ通り Via del Corso の遠方から眺めたときに、聖堂本体とファサードとの間に高さの差はないが、この聖堂の計画は、基本的には前任者であるフランチェスコ・ダ・ヴォルテッラ Francesco da Volterra による構想であり、マデルノはその計画に従って計画を実現したとされる。

### 2.3 サン・ピエトロ大聖堂のファサード

マデルノによるサン・ピエトロ大聖堂の計画(1607-1617年)は、ミケランジェロが計画した集中形式の部分に、ラテン十字形となるように身廊を付足し、それにファサードをほどこすと



Figure 12 C.マデルノ、サン・ピエトロ大聖堂、ファサード

いうものであり<sup>19)</sup>、旧バシリカの平面に重なるように、ファサード(1607-1614年)【Figure 12】は位置づけられた。途中でその両端に鐘楼を付加する計画変更を受け、マデルノはその基礎部まで建設し、後にベルニーニが担当したが、結局は失敗したため鐘楼は取壊された。

マデルノは、ミケランジェロによるクーポラが入口から見えなくなったとの批判を受けたが、実際にはミケランジェロの計画をできるだけ尊重し、教皇ほか多くの宗教関係者からの機能上の要求と折り合いを図るなかで、変更を最小限にとどめて全体を統合した。ファサードにおいてもその態勢は明らかであり、ミケランジェロによる意匠的な枠組みの中で、マデルノはサンタ・スザンナ聖堂で実現したように、外側から中央へ向けてピラスターからコラムへと彫塑性を強めて迫出すようにして、ペディメントにより中央部を強調しまとめる、という独自の手法を示している<sup>20)</sup>。

ファサードの2層目に「祝福のロτζア」を中心として窓が配列され、広場との強い繋がりが表される。ファサードの内側には、ボッロミーニも助手としてその建設に加わったポルティコ【Figure 13】が配置され、広場から直接身廊が続くのではなく、来訪者は一旦このポルティコ



Figure 13 C. マデルノ、サン・ピエトロ大聖堂、ポルティコ)

に受けとめられ、入口を入るとマデルノが創造した長大な軸線の空間を眺めることになる。

### 3. ボッロミーニによる聖堂建築のファサード

#### 3.1 16-17世紀ローマにおける聖堂のファサード

ボッロミーニによるオラトリオ会のファサード計画の意味を探るには、ボッロミーニが生涯にわたって手がけた多くの教会堂・礼拝堂・オラトリオなどにおいて、ファサードを中心に全体的にその計画を理解していかなければならない。そのためにはまず、マデルノについてだけでなく、当時のファサード一般の計画について把握する必要がある。そこで16-17世紀ローマに建設された聖堂のファサードについて、聖堂本体との関連性、修道院においては聖堂以外の建物各部との繋がり、および周辺環境との関係をもとに考察する。

まず、ルネサンス時代のアルベルティのように、聖堂のファサードを2次元的に捉え、幾何学やオーダーによって壁面を分割する方法【Figure 14】があげられる<sup>21)</sup>。無論、身廊や側廊の幅、採光の問題などを考慮に入れるため、ファサードが内部空間とは全く無関係に扱われ



Figure 14 L. B. アルベルティ、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂、ファサード

るわけではないが、中世以来この時期まで、聖堂は長い時間をかけて建設されたため、多くの場合本体とは別の建築家がファサードを担当することとなり、聖堂前面に掛けられたカーテンのように2次元的な壁として設計された。先述したジャコモ・デッラ・ポルタの設計によるイル・ジェズ聖堂のファサードは、アルベルティより1世紀ほど時代は下るが、やはりそこに聖堂内部との3次元的な関連は希薄である。また、狭い広場空間の中では大規模な修道院全体を眺めることはできないが、聖堂のファサードは、向かって右側に並ぶ修道院の領域のファサードに比べて、はっきりと都市空間のなかに際立った存在となっている。

次にあげられるのが、マデルノのサンタ・スザンナ聖堂のファサードであり、前述したように、かなり彫塑性が強められ3次元的な表現となるが、それは内部空間との呼応関係によるものではない。中央に聳える聖堂のファサードと、その両側の壁体は一体化してデザインされ、壮麗な広場空間を創上げたが、依然としてその内側の機能を外部表面に映し出すことはない。

さらに、聖堂が2次元的な壁にとどまらず、3次元的に前面広場の空間を創り出しているのは、ピエトロ・ダ・コルトーナによるローマの



Figure 15 G. L. ベルニーニ、サン・タンドレア・アル・クイリナーレ聖堂、ファサード

サンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂 Santa Maria della Pace (1656-1657年) のファサードである【Figure 6】。ファサード中央部の半円のポルティコが前方に張り出し、両側の壁体はその背景のように後方から大きく湾曲して弧を描く。ファサードは、ここでもやはり聖堂内部空間を直接反映してはいないが、外部空間に向かって積極的に働きかけ、小さな広場を舞台空間のように変貌させた。

ほぼ同時期に計画されたベルニーニによるサンタンドレア・アル・クイリナーレ聖堂 Sant'Andrea al Quirinale (1658-1671年)【Figure 15】は、聖堂の両脇は湾曲した凹面となり、中央のポーチが前面に張り出すなど、コルトーナによるファサードとの共通点も多い<sup>22)</sup>。

しかし、このファサードは、明らかに聖堂の内部空間と連携するように考案されていて、来訪者が外部の湾曲した壁体とポーチに導かれて建物内部に至ると、眼前に横長の楕円を描くドーム【Figure 16】を掲げた劇的な内部空間が繰り広げられる。

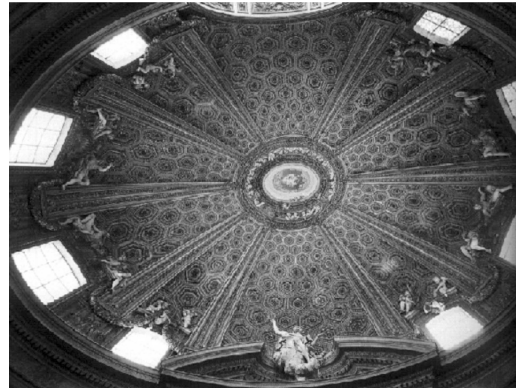


Figure 16 G. L. ベルニーニ、サン・タンドレア・アル・クイリナーレ聖堂、ドーム

### 3.2 サン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ聖堂のファサード

ローマのサン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ聖堂 San Carlo alle Quattro Fontane (1634-1667年) は、ボッロミーニが建築家として独立してすぐの仕事であり、建物は、居住棟、回廊、聖堂の順に建設された。聖堂のファサード【Figure 17】は、ボロミーニが亡くなる前に1層目まで仕上がり、残る2層目は甥のベル



Figure 17 F. ボッロミーニ、サン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ聖堂、ファサード



ナルド Bernardo Carpofo (1643-1709年) が変更を加えて完成させた<sup>23)</sup>。

きわめて彫塑的なこの聖堂のファサードは、マデルノによるファサードから、3次元的にいっそうの展開を見せたことが認められる。ボッロミーニが表現する力強い曲線を描く聖堂内部の壁面は、外部のファサードと3次元的に密接に関連し、デザインは連動している。聖堂内部もまた、ファサード以上に波打つ曲面と浮かび上がる立体的な円柱により【Figure 18】、劇的な表現である。印象の強いファサードによってその予兆が示されているものの、入口から導かれて、内部の縦長の楕円形のドームを戴く聖堂に入った人々は、当時の会士が「ただ眺め回すだけ」の状態になったと伝えるほど、その劇的な空間に驚かされた。

聖堂の向かって右手（西側）に隣接する回廊部分もまた、ボッロミーニが自由に設計できたと考えられるが、聖堂とは異なる平坦なデザインである。聖堂と関連付けて3次元的な凹凸をつけたり円柱を用いたりせず、聖堂からは対比的に、独立性を保ちつつそれを引き立てるような表現とした。平らな壁面には、計画以前の既存の開き口が残っていたが、むしろそれは立



Figure 18 F. ボッロミーニ、同、内観

面の配置計画のなかに活かされ、扉や窓の開口部をアクセントととする線の構成の中に組み込まれ、全体がまとめ上げられた。

また、サン・カルロ聖堂が位置する四辻には、噴水が配され、そこから東西方向に伸びるクイリナーレ通りには、塔が聳える聖堂と回廊部分のファサードとが面して壮観な見通しが演出されている。それに直交する南北方向のフェリーチェ通りには、ボッロミーニが初めに設計した修道士たちの居住棟と庭園のファサードが接し、クイリナーレ通りと合わせて眺められる劇的な都市景観を創り出している。

### 3.3 サンタニェーゼ聖堂のファサード

サンタニェーゼ・イン・アゴーネ聖堂 Sant' Agnese in Agone (1652-1666年)【Figure 19, 20】においては、ファサードの破風の下のコニスまでの主要部分がボッロミーニによる設計(1653-1655年)であり、高々と聳えるドームや両側の2つの塔も、ほぼボッロミーニの案に基づいている<sup>24)</sup>。

南北に細長いナヴォーナ広場の中央には、ベルニーニによる「四大河の噴水 Fontana dei Fiumi」(1651年)が築かれ、その西側にサンタニェーゼ聖堂のファサードが向かい合ってい



Figure 19 F. ボッロミーニのサンタニェーゼ聖堂とナヴォーナ広場



Figure 20 F. ボッロミーニ、サンタニェーゼ聖堂、ファサード中央部

る。ファサードの破風が配される中央部分、およびその両側に凹面のカーブを描く部分とに、独立性の強い巨大な円柱が立ち並び、力強く彫塑的な表現によって劇的な広場空間が演出されている。それに対して、その両側の2つの塔の下の部分には平坦な対のピラスターが用いられ、さらに両方の外側はセルリアーナの窓が配されたパラッツォ風のデザインに移り変わっている。

聖堂内部においては、ボッロミーニは既存部分を大きく取壊すことなく、少しの改変を加えて全体を統合し直した。以前はギリシア十字形の平面で各部の独立性が強かったが、交差部四隅に赤色大理石の円柱を斜め方向に配することで、中央部が集中性の強い八角形となり、全体的に統合された。凹面のファサードに迎えられて聖堂入口に入った人を、祭壇まで通された軸線が内部空間へと導き入れる。そこに見られるのは、サン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ聖堂のように、曲面と円柱による彫塑的な表現のファサードが、軸線によって流動的に内部空間へと繋がる、3次元的な効果を意図した計画である。

また、聖堂の塔よりさらに外側のファサードにあるセルリアーナの窓は、ボッロミーニが聖

堂の南側に隣接するパンフィーリ家の館 Palazzo Pamphili において、その広間の扉の装飾とともに設計したものである。パンフィーリ家は当時ナヴォーナ広場一体を拠点としてその勢力拡張を図っていた。聖堂とは機能が異なる内部空間までを含め、ファサードは全体として聖堂を中心にシンメトリーに仕上げられ、広場空間を支配しようとするパンフィーリ家の象徴になっている。

### 3.4 コッレジオ・プロパガンダ・フィーデのファサード

1644-65年にボッロミーニは、コッレジオ・プロパガンダ・フィーデの建物 Palazzo di Propaganda Fide と、それに付属するレ・マギの聖堂 Chiesa dei Re Magi (「東方三博士の教会堂」)【Figure 21】とを合わせて計画した<sup>25)</sup>。ボッロミーニが担当する以前に、教会堂はベルニーニが1633年に既に建立していたが、周囲の建物との都合上、設計が進んだ段階でボッロミーニにより全面的に取壊された。

プロパガンダ・フィーデの聖堂のファサードは、入口の中央部が凹面を描き、全体の壁面を分割するピラスターの間に開けられた窓には、それぞれ彫塑的な円柱やボッロミーニ独自のデ



Figure 21 F. ボッロミーニ、コッレジオ・プロパガンダ・フィーデ、ファサード

ザインの破風が配されている。建物に入ると奥には、特徴的な表現のファサードと3次元的に一体化するように聖堂内部の空間が広がっているかのように感じられるが、実際には入口を入ると玄関のような廊下へと続く。90°方向転換して、その左手に設けられた聖堂の扉口から内部に入ると、縦長の矩形平面の聖堂の軸線が、ファサードと平行するように伸びている。

一方、廊下の右手方向は、建物の別の用途に当てられ、シンメトリーなファサードは建物全体と調整されて、左半分のみが聖堂に重なっている。また、聖堂内部はヴォールトの肋を大オーダーのピラスターが支えるという、オラトリオと共通する構成である。プロバガンダ・フィーデの聖堂は、オラトリオよりもかなり後に設計されたが、多くの類似点が認められ、ボッロミーニは長い間その基本構想を保持していたと考えられる。

### 3.5 オラトリオのファサード

ボッロミーニが計画したオラトリオ（1636-1642年）は<sup>26)</sup>、会の教会堂であるサンタ・マリア・イン・ヴァツリチェツラ聖堂 Santa Maria in Vallicella のファサードの向かって左側に隣接して並び立ち、壮観な広場空間を演出している【Figure 1】。

しかし、オラトリオは、中央入口からまっすぐ奥まで軸線が通されるのではなく、プロバガンダ・フィーデの聖堂のように、中央の入口を入ると動線は90°左に向きを変える。その最大の要因となるオラトリオの場所については、ボッロミーニの前任の建築家パオロ・マルシェッリ Paolo Maruscelli（1596-1649年）による計画の中で規定されたもので、修道院の敷地全体における南西の角地に、長辺を南側に向けてオラトリオは配置されていた<sup>27)</sup>。

オラトリオのファサードは、トラヴァーチン

による教会堂のファサードに対して、それより控えめとなるように簡粗な素材の煉瓦造である。しかし、この凹面を描くオラトリオのファサードの独特なデザインは、修道院におけるその他の居住部分の外壁が、曲線や凹凸のない平坦な4層の壁面に規則的な窓割をした構成であるとは対照的である。オラトリオはその特異なデザインによって、聖堂とともに広場空間の中心となり、オラトリオを教会堂と同じカテゴリーとして扱うボッロミーニの考えが実際に表されたものといえる<sup>28)</sup>。

さらに、オラトリオのファサードは、人々を招き入れる人の腕のような緩やかに湾曲した形態で<sup>29)</sup>、全体的に3次元的な構成である。2層構成の壁面は、大オーダーのピラスターを用いて分節され、その間にはそれぞれ、ボッロミーニ独自の彫塑的なデザインがほどこされた扉や窓が配置された。

前述したように、ファサード中央に設けられた集中性の強い入口から、来訪者は直接オラトリオ内部空間に導かれるのではなく、オラトリオ前面の広間のような空間に入る【Figure 3】。そのまっすぐ前方に見える出入口まで進むと、オラトリオの北面に接する「第一の回廊」へと出る。一方、途中で西方に左折すると、オラトリオ内部に入り、来訪者の視線は東西方向の軸線沿いに進み、主祭壇に受けとめられる。主祭壇はその両側に聖歌隊のバルコニーがシンメトリーに配置され、ヴォールト天井の下で劇的な内部空間の中心となっている。

このように、オラトリオの内部の一体化した空間では、軸線がファサードと平行な東西方向に置かれ、さらに、説教壇が配置されるオラトリオの南北方向の中心線もまた、外部のファサードとは一致していない。

一方、オラトリオの上階にある図書館は、初めオラトリオのファサードと幅が揃うように立

ち上げられるはずであったが、設計途中で構造的な配慮から変更されてファサードの向かって左側の西方へ延長された結果、ファサードに収まり切らない部分が生じた<sup>30)</sup>。ボッロミーニは、オラトリオのファサードの自立したイメージを大切にしていたが、実際には平坦な煉瓦の壁体が、緩やかな凹面のカーブを描くファサードの背景のように張り付き【Figure 2】、その独立性は弱められた。

南面のファサードと、それに直交する（北方へ伸びる）西側の面は、『オプス』においては、現在よりはるかに開けた前面広場から同時に見渡されるように描かれている【Figure 1】。南西角部において平坦な西側ファサードから3スパン分だけ突き出しているのは、オラトリオとその上階の図書館の西側の壁面であり、窓や柱割のピラスターなどのデザインは、全体的にオラトリオのファサードと同じ調子に統一されている。その北方には、大規模な修道院の居住部分にあたる壁面が広がり、北方向のモンテ・ジョルダノ広場 Piazza di Monte Giordano まで、一律な窓割をほどこした平坦な煉瓦造の壁体が続く。このモンテ・ジョルダノ広場に面して、ボッロミーニが計画した建物の北西角部（1647-1650年）に聳える時計塔が、遠く南方から見渡した視界のなかでアクセントとなっている。

一方、劇場都市ローマを描写するファルダの景観図には、オラトリオ会の建物に対して、このような90°の角をなし2方向を見渡す表現は見当たらない<sup>31)</sup>。しかしここでは、ボッロミーニが広場の主役となる教会堂とオラトリオのファサードだけではなく、それらの位置づけを修道院全体とその周囲を含む広い視野のなかで確認し、統一しようとしていた様子が窺われる。

#### 4. 『オプス』からみるオラトリオのファサード計画

『オプス』では、オラトリオの他にも、会の活動に応じて求められる部屋や、機能上必要とされる回廊や階段などについて詳細に説明されている。そこに付された立断面図・断面透視図【Figure 4】は、意匠デザインだけでなく、建築各部の立体的な関係やボッロミーニが設計上抱えていた問題の解決法などを理解するうえでも有効である。ここでは、オラトリオのファサードと、これら修道院内の建築各部との関わりについて、『オプス』を読み解き考察する。

はじめに、『オプス』においては、会士たちの実利性を求める態度が繰り返し主張されている<sup>32)</sup>。その建築には装飾を押さえ贅沢な素材を使用せず、オラトリオのファサードに対しても、ルスティカの煉瓦造とするように求められた、と伝えられる。ファサードの窓や扉、さらに暖炉などの細部も、簡素にするよう指示されたとのことであった。『オプス』には、イエズス会やテアティノ会の名が具体的にあげられ、建設活動にあたっては、オラトリオ会士たちが他の新修道会の建築を強く意識していた様子が窺われる<sup>33)</sup>。しかし、会士たちは競い合うのではなく、あくまで簡粗で謙虚な建築を求め、ボッロミーニはこうした清貧の精神に応じて、工夫を重ねて煉瓦造の新たなオーダーをつくり、ファサードを完成させた。

実際、ファサードをオラトリオ内部だけではなく、建物の他の部分と合わせて調整するには、ボッロミーニは数々の問題に直面した。たとえば、オラトリオが接する北側の「第一の回廊」においては、アーケードが90°に折れ曲がる角の部分に厚みが生じるが、これに対応するオラトリオの壁体と、整然とした窓の配置とが求められる【Figure 3】。そのため、ボロミーニは、オラトリオ内部では長手方向の壁を、同じスパ

ンで単純に分割するのではなく、対のピラスターを用いて4つに区分けした上で、中央に位置する対のピラスターの間を広げて説教壇を挿入して釣り合いをとったと、念入りにその過程を説明する<sup>34)</sup>。ファサードは1枚の面であっても、内部のオラトリオと、さらにその奥にある「第一の回廊」のアーケードとの調整を含めて設計される必要があった。

さらに、オラトリオの内部空間と、それを外部に表すべきファサードの位置が一致しないという問題<sup>35)</sup>は、ファサードの左手半分がオラトリオの側面全体に沿うように考案しなおされ、広場から眺める人々の視線と内部へ導かれる動線に対して、劇的にはたらきかけるよう効果的に活かされた。

オラトリオのファサードは両腕を広げた人体を表し、その湾曲した形態によって、告解や秘跡への列席に集まる大勢の人々をオラトリオの中に招き寄せる。全体は5つの部分に区分かれて、中央部分が胴体の部分に、湾曲する両側の部分が両腕に相当するとされるが<sup>36)</sup>、ファサードの端で大きく前方に突き出すピラスターは、オラトリオの大空間を覆うヴォールトを補強する控壁のような役割があり、構造的な観点からその重要性が述べられている<sup>37)</sup>。

また、ポッロミーニは、「教会堂の申し子」であるオラトリオのファサードを、教会堂より高い位置につくらないように苦心した様子を伝えている。その原因は、「第一の回廊」の北側に配される既存の聖具室が、教会堂よりも1 mほど(4 palmi)床面が高いことであるが、ポッロミーニは、聖具室からオラトリオのファサードまでの床面を一様に高くはせずに、ファサードから「第一の回廊」に至る手前に階段をつくり、オラトリオの床面は低く抑える一方、内部は天井高を他の部分に揃えて対処し<sup>38)</sup>、オラトリオ自体の高さを大きくとることも合わせて達

成した。ファサードから離れた位置にあっても、建物の既存部分は、各部の3次元的な関連性を考えながら利点として計画に活かされ、新たに全体構成がまとめ直されたといえる。その設計過程を説明するために、『オプス』には立断面図・断面透視図が不可欠であろう。

オラトリオの上階の図書室は、前述したように、左手に引き延ばされた結果、実際にはファサードの背後に収まらず、建物の西側の面に合わせて建ち上がっているが、『オプス』に記されているのは、それ以前の計画である<sup>39)</sup>。図書室内部には、本棚が床面から窓の下まで立ち上がり、本棚の上は回廊となる。1 mほどの高さの窓のもとに、その壁の厚みを利用した腰掛け付きの台により、少し奥まった場所で美しい景色を眺め、落ち着いて勉強できるように配慮されている。

図書室から外に出るバルコニーは、オラトリオの全体的な凹面の中心から突き出す形で生み出され、そこに座って勉強できるよう手摺付きの露台などが設けられた。

## 5. 結論

オラトリオのファサードは、人口が密集する地域に開かれた広場に、教会堂と独立した形で並び立ち、独特な景観を創り出している。人々を招き入れるその湾曲した形体が意匠上まず注目されるが、『オプス』のなかでは特に、入念に描いた図面を用いて詳細にその設計過程が説明され、既存部分の制約を利点に転じ、3次元的な視点から全体を調整して統合しなおそうとしたポッロミーニの意図が強く表されている。

また、オラトリオのファサードは、ポッロミーニが計画したその他多くの聖堂のファサードと同様に、都市空間に対する接点として、人々や環境との関わりを強く意識しながら、内部空間と統合的にデザインされている。その際、聖堂

のファサードに彫塑的な構成を創造したモデルのように、ポッロミーニは、円柱とピラスターによる彫塑性を活かし、ファサードにそれらを巧みに組合せて配置した。ポッロミーニはさらに、内外の壁体に曲面を使用することにより、ピラスターとコラムを壁面に融合させ、ファサードと聖堂内部の空間とを一体化させている。結果的に、ファサードと内部空間の場所が一致しない、両者の軸線が90°異なる、などの点も、来訪者に対して次々と劇的に展開しはたらきかける空間として創りかえられた。

#### 註および参考文献

- 1) ラテン語読みで『オプス・アルキテクトニクム』と称されるのは、18世紀に出版されたジャンニーニ版にイタリア語の文とラテン語の文が併記されるためであり、それに67枚の図版が付けられている：Borromini, Francesco, *Opera del Cav. Francesco Borromini Cavata da Suoi Originali cioè L' Oratorio, e Fabrica per l' Abitazione De PP. Dell' Oratorio di S. Filippo Neri di Roma. . .*, Sebastiano Giannini (edizione di), Roma, 1725. この他、以下のような出版書を参考にした：Borromini, Francesco, *Opera del Cav. Francesco Borromino Cavata da' suoi originali cioè L' Oratorio, e Fabrica per l' Abitazione De PP. Dell' Oratorio di S. Filippo Neri di Roma ; Con le vedute in Prospettiva, Con lo Studio delle Proporzioni Geometriche, Piante, Alzate, Profili Spaccati, e Modini* (presentazione critica e note di Paolo Portoghesi), Roma, Edizioni dell' Elefante, 1964, e London, Gregg Press, 1965 ; Borromini, Francesco (a cura di Maurizio De Benedictis), *Opus Architectonicum*, Roma, De Rubéis Editore, 1993 ;
- Borromini, Francesco (a cura di Joseph Connors), *Opus Architectonicum*, Milano, Edizioni Il Polifilo, 1998.
- 2) 現存する手書き文書自体は、オラトリオ会士ヴィルジリオ・スパーダ神父が起草したものであるが、スパーダ神父は当時のポッロミーニのよき理解者であり、建築に対する見識もあり、ローマのオラトリオ会の建築計画ではポッロミーニと共同していたことから、この『オプス』の執筆にあたっては、ポッロミーニとともに、オラトリオ会の建築の計画について両者の見解を表明したと考えられる。
- 3) オラトリオ会 Congregazione dell' Oratorio の創立は、1575年フィリッポ・ネーリ (1515-95年)による：Ponelle, Louis and Bordet, Louis, *St. Neri and Roman Society of His Times 1515-1595* (translated by Ralph Francis Kerr), London, Sheed & Ward, 1932。ここでは英語でいう monastery, convent, congregationなどを“修道会”と訳し、その建築については“修道院”と表記した。
- 4) 新修道会の創設は、テアティノ会が1524年、バルナバ会が1535年、イエズス会が1540年である：L. De Molen, Richard (ed. by), *Religious Orders of the Catholic Reformation*, New York, Fordham University Press, 1994 ; W O' Malley, John, *The First Jesuits*, Cambridge, Massachusetts, London, Harvard University Press, 1993.
- 5) Connors, Joseph, *Borromini and the Roman Oratory : Style and Society*, Cambridge, London, MIT Press, and New York, The Architectural History Foundation, 1980.
- 6) 18世紀のノッリによるローマの地図を見ると、これらの修道会が占める敷地の大きさ

- が明らかである : Nolli, Giambattista, *Roma al tempo di Benedetto XIX*, Roma, 1748.
- 7) Hess, Jacob, *Contribuiti alla storia della Chiesa Nuova (Santa Maria in Vallicella), Scritti di storia d'arte in onore di Mario Salmi III*, Roma, De Luca Editore, 1963 ; Strong, Eugénie, *La Chiesa Nuova*, Roma, Società Editorice d'arte illustrata, 1923.
- 8) ボッロミーニの生涯については同時代の Baldinucci (1728) ; Passeri (1772) の伝記に著され、さらに後年になって Pascoli (1730) なども記している。また、若年期のボッロミーニについての研究論文は、Kahn-Rossi, Manuela e Franc, Marco, (a cura di) , *Il giovane Borromini : Dagli esordi a San Carlo alle Quattro Fontane*, Lugano, Museo Cantonale d'Arte, Milano, Skira editore, 1999.
- 9) マデルノについては、Hibbard, Howard, *Carlo Maderno and Roman Architecture 1580-1630*, London, A. Zwemmer Ltd., 1971 ; Donati, Ugo, *Carlo Maderno architetto ticinese a Roma*, Lugano, S. A. Arti Grafiche già Veladini, 1957. マデルノとボッロミーニとの関係については、Hibbard, Howard, "Borromini e Maderno", *Studi sul Borromini : Atti del Convegno promosso dall'Accademia Nazionale di San Luca* vol. 1, Roma, De Luca editore, 1967, pp. 497-506.
- 10) H. Hibbard, *op. cit.*, 1971, pp. 88-92 ; Wittkower, Rudolf, *Art and Architecture in Italy 1600-1750*, Middlesex, Penguin Books, 1982 (1st ed. : the Estate of Rudolf 1958), pp. 111-115, 143, 197-198, 232-1-232 ; Portoghesi, Paolo, e Fagiolo Marcello (a cura di), *Roma Barocca : Bernini, Borromini, Pietro da Cortona*, Milano, Electa, 2006.
- 11) Portoghesi, Paolo, *Borromini nella cultura europea*, Roma-Bari, Editori Laterza, 1982 (1<sup>a</sup> ed. 1964).
- 12) たとえば、サンタンドレア・デッラ・ヴァッレのファサードの計画では、マデルノとボッロミーニが共同して図面を描いている : Uffizi, A 6734, Firenze.
- 13) H. Hibbard, *op. cit.*, 1971, pp. 38-43. ; コーリン・ロウ & レオン・ザトコウスキ『イタリア十六世紀の建築』(稲川直樹 訳) 六耀社 2006年 pp. 373-376.
- 14) R. Wittkower, *op. cit.*, 1982, pp. 241-242, 286-288.
- 15) 当時ヴィニョーラは著名な建築書を出版した : G. B. Vignola, *La Regola delli Cinque Ordini d'Arthitettura*, Roma, 1562 (長尾重武 訳・註解『建築の5つのオーダー』中央公論美術出版社 1984年。デッラポルタによるイル・ジェズ聖堂も、その他の新修道会を初め世俗の関心を集めていた。
- 16) サン・マルコ広場の対岸に、ファサードを向けて、サン・ジョルジョ・マッジオーレ聖堂 San Giorgio Maggiore (1565年)、イル・レデントーレ聖堂 (1576-1577年) が建立された。ファサードには、ヴォリュートのかわりに切断した破風を立体的に重ね合わせるといふ複雑な手法が用いられた。なお、マデルノがパツラーディオの建築書を所有していたことは、H. Hibbard, *op. cit.*, 1971, p. 103. の遺品目録にうかがわれる。
- 17) H. Hibbard, *op. cit.*, 1971, pp. 28-30.
- 18) H. Hibbard, *op. cit.*, 1971, pp. 18, 40-42.
- 19) H. Hibbard, *op. cit.*, 1971, pp. 65-74 ; Spagnesi, Gianfranco (a cura di), *L'architettura della basilica di San Pietro. Storia e costruzione*,

- atti del convegno* (Roma, Castel Sant'Angelo, 7-10 novembre 1995), Roma, Quaderni dell' Istituto di Storia dell' Architettura, Bonsignori Eitore, 1997.
- 20) Ibidem.
- 21) たとえば、アルベルティは1448年頃-1470年、ゴシック様式のサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の本体に、数学的な比例関係にもとづく古典的なファサードを設計した。
- 22) ベルニーニに関する膨大な研究論文のなかでは、まずは和文の石鍋真澄『ベルニーニ バロック美術の巨星』（吉川弘文館1985年）があげられる。欧文では、Borsi, Franco, Bernini, Milano, Electa, 1980 (translated by Robert Erich Wolf, New York, Rizzoli, 1984) ; Marder, Tod A., *Bernini and the Art of Architecture*, New York, Abbeville Press, 1998. などを中心に参照した。
- 23) ボッロミーニによるサン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネの計画に関しては、*San Carlo alle Quattro Fontane di Francesco Borromini, nella 'Relazione della fabrica' di fra Juan de San Buenaventura* (a cura di Juan María Montijano García), Milano, Edizioni Il Polifilo, 1999. によって史料が示された。また日本語の文献としては、横山正『バロックの真珠 サン・カルロ・アッレ・クアトロ・フォンターネ聖堂』（磯崎新+篠山紀信 建築行脚 9 六耀社 1983年）があげられる。
- さらに、Portoghesi, Paolo, *Storia di San Carlo alle Quattro Fontane con una appendice sul cantiere e le maestranze di Marisa Tabarrini*, Roma, Newton & Compton Editori, 2001 ; Connors, Joseph, “Un teorema sacro : San Carlo alle Quattro Fontane”, in *Il giovane Borromini* , 1999, pp. 459-74. などを参照した。
- 24) Blunt, Anthony, *Borromini*, Cambridge-London, The Belknap Press, 1979, pp. 156-160 173-174 ; R. Wittkower, *op. cit.*, pp. 213-217.
- 25) A. Blunt, *op. cit.*, 1979, pp. 183-195 ; R. Wittkower, *op. cit.*, 1982, pp. 227-229.
- 26) 註1)および註5)を参照 : J. Connors, *op. cit.*, 1980 ; J. Connors, “Introduzione”, in Francesco Borromini, *Opus Architectonicum, op. cit.* (a cura di J. Connors), 1998, pp. IX-LXXXVIII.
- 27) J. Connors, *op. cit.*, 1980, pp. 13-21.
- 28) 『オプス』、第7章 “オラトリオのファサードについて” を参照。
- 29) 同上。
- 30) 同上、および J. Connors, *op. cit.*, 1980, p. 56.
- 31) Falda, Giovanni Battista, *Il Nuovo Teatro delle Fabbriche et Edifici, in prospettiva di Roma Moderna*, Libro Primo, Roma, 1665, tavv. 21, 22, 23.
- 32) 『オプス』、第5章 “全体的な装飾について” ; および第7章を参照。
- 33) 『オプス』、第5章を参照。
- 34) 『オプス』、第6章 “新しいオラトリオについて” を参照。
- 35) 『オプス』、第7章を参照。
- 36) 『オプス』、第7章を参照。
- 37) 『オプス』、第6章を参照。
- 38) 『オプス』、第7章を参照。
- 39) 『オプス』、第28章 “図書室について” を参照。
- \*Figure における写真は、筆者撮影による。